

「幼きカメラマンから教わったこと」

兵庫県 山中愛

目の前に一人の少女がいる。目の前にカメラを構えた少女がいる。

夏休みに入ってすぐ、私はある遊園地に遊びに来ていた。久しぶりの遊園地。私の心は弾んでいた。けれども、弾みすぎていたのだろうか、歳なのだろうか。疲労ピークになってしまった私は、一人ベンチで休んでいた。

その時に見たのだ。5歳くらいの少女を。好奇心あふれるその年で、彼女の瞳に何が映っていただろう。珍しい建物、おいしそうな食べ物、または人、人、人の波。

少女は手に持つカメラを構えた。最初はおいしそうな匂いが漂うワゴンに、次は可愛くデザインされた建物に、そして地面に落ちたポップコーンを突く雀に。けれども、構えただけで彼女は何も撮らなかった。

「〇〇へ。」

彼女は突然振り向いた。振り向いた先にいたのは30代後半の男性。きっと彼女の父親なのだろう。彼女の表情を見ればすぐにわかった。彼女は父親に向かってカメラを構えた。父親は一瞬目を丸くさせたが、すぐに微笑むとVサインを作った。

カシャ

彼女はシャッターを押した。ようやく撮った。周りに幼き少女にとっては珍しいものがたくさんあるというのに、彼女は父親を撮った。

撮り終わった後の少女と父親の笑顔は、今でも思い出せる。本当に幸せそうな笑顔。今思えば、彼女はあの瞬間だけ、プロのカメラマン以上になれたと思う。珍しいものではなく、自分にとって素晴らしいものを撮ったからだ。幼いからこそわかる、大切なこと。

今の世の中の人々は、本当に素晴らしいもの、大切なことを忘れてしまっている。15、6歳の私もそのひとり。幼い彼女のおかげで思い出せたのだ。自分の夢を。彼女のように自分にとって本当に素晴らしいものを探したい。そして、それをこの手で生み出したい。それが私の、作家としての夢。